

上御霊社還幸祭における牛車

— 近世京都の祭礼と朝廷 —

村 上 紀 夫

はじめに

京都市内では、賀茂祭・時代祭・今宮祭、そして御霊神社（上御霊社）^①の祭礼で牛車^②が使用されている。

牛車は、応仁の乱後は貴族たちの移動手段としては次第に使用されなくなっていた。^③近世以降は禁裏で牛車が再興され、車役人と呼ばれる牛車の運行を主な職務とする地下官人の手で運用された。しかし、近世の天皇は移動に鳳輦を使用し、牛車の使用は上皇や皇太子などの移動や入内など限られた儀礼的場面にとどまる。つまり、一般的な移動手段としては、牛車は既に歴史的役割を終えていたといえる。こうした牛車が、なぜ一部の祭礼に取り入れられているのか。そして、現代の祭礼に見られる牛車が、前近代の

禁裏において運用されていた牛車といかなる関係にあるかを論じることが本稿の課題である。

賀茂祭は、下鴨・上賀茂神社への勅使派遣にともなって御所の牛車^④が使用されるもので、前近代にも確認することができる。牛車が登場することに不思議はない。時代祭は平安神宮の祭礼であり、近代に始まったものである。それゆえ、近世の牛車と直接の関わりはないと見るべきだろう。今宮祭の牛車は、牛が車を牽いてはいるが、勾欄が周囲に設けられた館のような形態で、人が乗る牛車の形態とは大きく異なっており、必ずしも故実に則っているとはいえない。前近代において禁裏で使われていた牛車との直接的関係はないだろう。

一方、上御霊社の御霊祭で登場する牛車は、全長五・九



図1 上御霊社還幸祭の牛車

に及び、五月一日に行われる還幸祭において神輿三基を先導する。後述するように網代車という人が乗ることのできる牛車と同じ形をしている。後陽成天皇からの寄進とも伝えられており、これが事実だとすれば、貴重な一七世紀の牛車の作例ということにもなる。

この上御霊社で使われている牛車で特筆すべきは、乗降時に使用する取り外し式の階段である棧、牛を牛車からはずして停車する際に轅の下に置く櫓、さらに御簾の上げ下げなどで使用する掛竿、停車時に轅を支えるために使う掛

杖、牛車の装飾となる出布など、牛車のみならず、牛車に附属する諸道具類がすべて揃っていることにある(図1)。

上御霊社は御所の氏神とされ、これまでの研究でも朝廷と上御霊社との関係について、さまざまな

事実が明らかにされてきた。そこでは御所内侍所の建築が上御霊社の社殿として下賜されてきた例や、祭礼行列が御所内に入っていたこと、さらに多様な祭具が天皇や仙洞から寄進されていたことなどが指摘されている。

してみれば、後陽成天皇から寄進されたという伝承をもつ牛車についても、こうした先行研究の成果と関わって、朝廷と上御霊社とのつながりをうかがわせる事例のひとつとして検討する価値はあろう。

この牛車は、現在は上御霊社の還幸祭で使われている。上御霊社の神幸・還幸祭については、そこで見られる剣鉾について早くから関心を持たれていたほか、近世都市祭礼の前提としての中世の御霊祭についての研究、さらに末広神輿に着目し、その昇き方と地域社会の意識を論じた研究などがある。しかしながら、これら還幸祭について論じた諸研究で、特に牛車に着目する記述は見あたらない。

そこで、本稿では御霊祭で使われる牛車について、まず現状を確認した上で、いつどのようにして上御霊社の祭礼で使われるようになったのかについて明らかにする。そのうえで、祭礼を介した朝廷と上御霊社との関係についても検討したい。

一 現状——牛車を中心に——

近世における上御霊社の祭礼は、約三〇日間かけて行われていた。七月一日に上御霊社から御旅所の中御霊に神輿が渡御し、神輿は一ヶ月にわたって御旅所に滞在し、八月一日に「御霊会」と呼ばれる還幸祭が行われていた。近代になると、それまで御旅所として使われていた中御霊がなくなるとともに、日時も変更となるなど、祭礼のかたちは大きく変わった。現在の御霊祭は五月一日は社頭の儀のみで一八日に還幸祭として、神輿の巡幸が行われている。そこでは、神輿だけでなく、剣鉾なども渡御している⁸。

まずは、二〇二四年度の御霊祭における調査をふまえて、現在の牛車について概略を確認しておこう。

牛車は、普段は境内の土蔵造の車舎に収納されている。この車舎には破風下の妻壁と左右扉の計三ヶ所に菊紋があらわれている⁹。牛車は、還幸祭当日には猿田彦の神面を乗せて神輿を先導する。

牛車の車体左右壁面は網代に編まれ、絵が描かれている。木部は黒漆で塗られ、取り付けられている金具には、複数の箇所に菊紋が見られた。屋根は軒部分が唐破風のような

曲線を描くもので、雨眉車とよばれる形態となっている。雨眉車は、上皇・親王・摂政・閑白などが平服の際に乗車するものであった¹⁰。

還幸祭当日、牛車を納めている境内の車舎は扉が開かれており、牛車の御簾の下からは下簾したすだれという衣が出されている。正面には乗降用の階段「棧」が取り付けられ、轅の下に「榻」という台を置いた状態となっている。牛車の左右に菊紋と「御車」と書いた赤い提灯があり、前には御神酒が供えられ、手前には蠟燭が一本だけ置かれる。「さい銭」と書かれた黒く塗られた竹が置かれているが、柵が閉じられて注連縄が張られているので、近づいて賽銭を投じることはできない。

午前一時、牛車の棧・榻が取り外されて車舎から引き出され、南側の路上に移動させられる。この時、車内御簾の下から前面に出されていた布、「下簾」は車内に収納していた。また、棧や榻は巡幸時には使用せず、車舎内に置いたままにしていた。

その後、頭部と尾部に四手しでを付けた黒牛が繋がれて、車童子役の少女などが配置につき、行列の準備が整うと神輿の宮出しを待つて出発する。



図2 牛車とともに持ち運ばれる二本の掛竿

牛車は、天狗面の絵の下に「猿田彦大神」と記した旗と、車舎内で牛車の前に置かれていた

「御車」と記した菊紋入りの提灯が先導する。その後ろに牛飼童子を先頭にした牛車が続く。牛車の後には二本の掛竿——先端に鍵形、Y字形の金属を付けた棒（図2）——をもった二人が従う。そして車止、掛杖、車童子役の少女が休憩時に座る床几などを乗せたりヤカーなどが続く。

還幸祭の行列は、太鼓や獅子などのあとに剣鉾が続き、八乙女、禰宜、金棒、そして弓・箭・盾などが並ぶ。さらに稚児の行列などがあつて、牛車、三基の神輿などの順となっている。猿田彦を乗せた牛車は、神輿の先導役を務めるのである。

以下、祭礼行列は所定の順路を経て、室町通上立売上ルにある京都市立室町小学校で三〇分程度の休憩をとる。休憩後、今出川通りを通り、京都御所へ。二〇一二年の御霊

祭からは、神輿とともに牛車も京都御苑内へ入るようになった。⁽¹²⁾一六時五〇分頃に牛車は今出川御門から京都御所に入り



図3 京都御所に入る牛車

（図3）、朔平門前へ向かう。その後は、京都御所を出て上御霊社へ帰る。

この上御霊社で使われている牛車には、冒頭に記したように乗降時に使用する棧、停車時に轆

の下に置く榻、御簾の上げ下げ使用する掛竿、停車時に使う掛杖、牛車の装飾となる出布など、牛車に附属する諸道具類がすべて揃っている。しかしながら、牛車への乗降時に使用する取り外し式の棧や、御簾の上げ下げなどに使う掛竿などは、人が乗るわけではなく神面の渡御に使用される牛車には必ずしも必要なものではない。だから、棧や榻などは、巡幸時には車舎に置いたままになっており、使用していないかった。こうした、実際には使用することのない

道具類まで揃えられているのは、なぜか。

牛車は、前述のように慶長年間に後陽成天皇から寄進されたものと伝えられている。こうした神幸には必ずしも必要としない道具類まで揃っているということは、牛車が祭礼用に作られたものではなく、実際に牛車として使用されていたものであった可能性も検討しておく必要があるであろう。次章では、この後陽成天皇寄進の伝承について検討を加えてみたい。

二 上御霊社還幸祭における牛車の登場

戦国時代の御霊会の様子を描く、上杉本洛中洛外図（左隻第六扇）では、神輿の前方にいる人物が手に鉦を持ち、猿田彦の神面をかぶって歩いている。このことから、少なくとも後陽成以前の戦国期には神面の渡御に牛車が使われていなかったことは間違いない。それでは、いつから牛車を使用されるようになったのか。

結論を先に言えば、御霊祭で使われる牛車が後陽成天皇の寄進によるという伝承は事実と異なると考えられる。

後陽成天皇の在位期間は、天正一四年（一五八六）から

慶長一六年（一六一一）で、後水尾天皇に譲位後は上皇となり、元和三年（一六一七）に死去している。牛車との関わりでいえば、後陽成天皇は豊臣秀吉の演出による聚楽第（行幸当時の天皇であること）を想起したい。実は、戦国期以降は牛車は次第に使用されなくなっており、天正一六年（一五八八）の聚楽第行幸にあたって、豊臣秀吉が参内する際に使用した牛車は、前田玄以が諸記録を調査して再興したものである。この時の子細を秀吉側近の大村由己が記した『聚楽行幸記』には

鳳輦牛車そのほかの諸役以下。事も久しくすたれたる事なれば。おほつかなしといへども。民部卿法印玄以奉行として。諸家のふるき記録故実など尋さぐり勤らる。¹⁴

と記している。三宝院義演によれば、この時には「大乘院ノ車ヲ被借渡、所司代玄以法印奉行トシテ作之、聚楽亭行幸之時、太閤初テ乗車¹⁵」とあるから、天正期には京都に牛車が残っておらず、かろうじて奈良の大乗院門跡が牛車を保有していたことだろう。

その後、征夷大將軍となつて牛車宣旨が出される徳川家康も、事前に松田政行に命じて牛車の「絵図を禁裏¹⁶」から取り寄せ、山科言経や中院通勝に問い合わせている。¹⁷

なお、三宝院義演は文禄五年（一五九六）に、「近代」までは乗車、つまり牛車に乗って参内していたにもかかわらず、「板輿」を使わざるを得ない現状について「零落無念」と記していた。同時に秀吉以降、秀次が「毛車」を作り、聚楽第に保管されているが、「太閤御一人ノ外ハ、乗ヘキ事モ、当時諸人不知、仍親王ト云、一人ト云、乗車アル貴重無之」と書き記している。¹⁸ こうした義演の言葉から見て、一六世紀末の京都では、牛車はほとんど使われることはなく、牛車そのものも全く残されていなかったのだらう。¹⁹

後陽成天皇の頃には、記録にもとづいて自身の牛車を新造できた天下人や、古い車両を保管していた奈良の大乗院門跡を除けば、御所周辺には牛車の記録が伝わるのみで、実物は存在していなかったのである。そもそも牛車がなかったのだから後陽成天皇によって上御霊社に牛車が寄進されたとは考えにくい。

とはいえ、後陽成天皇以外の天皇によって牛車が寄進された可能性も否定できないので、近世における御霊祭の様子も確認しておこう。いつから牛車が使われるようになったのだろうか。

貞享二年（一六八五）の序文がある京都の年中行事書で

ある黒川道祐『日次紀事』の八月一日「上下御霊会」の項によれば、「一人竿頭捧道祖神仮面、先神輿」とある。²⁰ つまり、一七世紀段階においては、洛中洛外図に描かれていた神面（ここでは猿田彦ではなく「道祖神」とある）は竿先に付けられ、高く掲げられた状態で神輿を先導していたというわけである。これでは、牛車が使用される余地はないだらう。

続いて、天明七年（一七八七）に刊行された『拾遺都名所図会』巻一に所掲の「御霊神事」の図を見よう。「猿田彦」と書かれた部分には、大きな面らしき物が描かれている（図4）。これが神面だらう。神面の乗り物の前に牛は見えず、車輪も描かれない。三方が吹放しになっており、どうやら手輿のようなものが使われるようになっていたようだ。一七世紀までの竿に神面を付けた状態から、手輿が使用されるように変わってはいるが、一八世紀末までは牛車の使用は確



図4 『拾遺都名所図』(筆者蔵)に見える「猿田彦」

認できない。

それでは、いつから牛車が登場したのか。代々、藏人所出納を務めていた地下官人平田家当主の日記のうち『平田職厚日記』に次のような記事が見える。

【史料1】⁽²⁾

一申剋頃御霊神輿御通行、当年自 御所御車頼之寄附有之、今日初而被牽之、王之鼻被乗之、網代彩色文等ハ未
來候よし也、平野屋孫兵衛・車也、予如例於門内拝申也
笹屋九兵衛等世話方之由也無之、追而出

平田職厚は、毎年の御霊祭にあたって、自邸で神輿を迎えて拝している。この記事によれば、享和二年（一八〇二）の還幸祭で、初めて「御車」が牽かれたことがわかる。なお、「王之鼻」⁽²⁾が乗車していたという記事から、この時には現在と同じく「王之鼻」、すなわち猿田彦が乗せられていたようである。

この史料では「自 御所御車頼之寄附有之」とある。光格天皇へ牛車の寄進を願い、それを許されたところなので、一見すると御所の牛車を譲渡されたかのようにも見える。しかし、そうではないことが史料の割注から明らかとなる。「彩色文等ハ未無之」とあるから、この時点においては未塗装だったのである。御所で使用されていた既存の牛車を

下賜されたとすれば、このようなことはあり得ない。

このことから、牛車は享和二年（一八〇二）の還幸祭の少し前から製作が始められ、車体は完成したが塗装を終えるよりも早く還幸祭当日を迎えてしまったと考えるのが妥当だろう。貴顕による祭具寄進についての事例研究を重ねている村山弘太郎は、貴顕からの寄進の多くは金銭で渡されることが多いと指摘する。⁽²⁾この点に鑑みて、「寄附」という史料上の文言については、実物の牛車下賜ではなく、牛車製造費用としての金銭が寄進されたという程度の解釈に留めておくはなさそうである。

享和二年（一八〇二）に牛車を新調したことを裏付ける史料は他にもある。禁裏での牛車運行にあたっていた車童子吉田弥一による『御車役儀日記』の次の記事である。

【史料2】⁽³⁾

同日惣司孫之進殿入来、御用ニ付候而ニ而ハ無御座候
上御霊社御神事之節、大宮様俗ニヲ、ノハナ又猿田彦是迄白キ
轅之様成ものニ奉乗候所、此度宮本今段々被願
御^所■同様之御車当廿三日被 免候ニ付、御牛具糸具等一
統不案内之事ニ候間、何卒貴家ニ御扣有之候ハ、拝見仕
度被申候故、則見セ申出車之通写被帰候

吉田弥一のもとを訪れた惣司孫之進とは、車役人で車大工・車副を務めている人物である。彼は、上御霊社で猿田彦は「白キ轡」^{②⑥}のような物に乗っていたが、「宮本」から「御所同様之御車」使用を願い、六月二三日にそれが許されたと言っている。このことから、やはり牛車は既存品を下賜されたものではなく、「同様之御車」を新調して使用することを許されたと見るべきだろう。

そうすると、【史料1】に見える「網代車也」という表現も非常に興味深い。故実に基づく多種多様な形態の牛車が存在していたなかで、地下官人の平田には「網代車」という車種であると明確に判断できたわけである。この牛車は、牛が平安時代風にしつらえられた車両を牽いているというだけではなく、故実をふまえて網代車のかたちをかなり忠実に模したものだということになる。

【史料2】の後半は、惣司孫之進が、車を牽く牛に使用する道具や糸などについて不案内なので、吉田家で所蔵している記録類の閲覧を願っている。吉田は快諾し、「出車」^{いだしぐるま}で使用する諸道具類を惣司が書き写して帰っている。この事実も、牛車のみならず諸道具類も既存のものを使っておらず、新たに自分たちで作成していたことを示しているだ

ろう。

それにしても、例え未完成であつたとしても、六月二三日に牛車の使用を許されてから、わずかに二ヶ月足らずで牛車本体を完成させて運用にまでこぎ着けているのは驚くべきことではないだろうか。次に、この牛車製造にどのような人が関わっていたか、なぜこれほど短時間で蔵人所出納の平田職厚が、一目で明確に「網代車」と判断できるような完成度の高い牛車を作ることができたのかを検討しておこう。

三 牛車をとりまく人びと

まず、手がかりになるのは【史料1】にある上御霊社の牛車「世話方」である。ここで名前の挙がっている笹屋九兵衛は、上京の上柳町年寄だった^{②⑦}。上柳原町といえ、上御霊社からは西にわずか二〇〇メートルほどの距離だ。笹屋九兵衛は、上御霊社の氏子の一人として、地域を代表する有力者として名を連ねているのだろう。

問題は、もう一方の平野屋孫兵衛である。この人物については、『平田職厚日記』に次のような注目すべき記事が

見えている。

【史料3】⁽²⁸⁾

一岩佐主税来、惣司孫之進町分名前平野屋理助与改名届書、岩佐主税自宅ニ而平野屋孫兵衛与相名乗候届書、吉

田孫作変宅届書写差出候事

これは、車役人から出納平田家へ、車役人が町方で名乗っていた名前などを届出た際の記事である。岩佐主税は、車役人のひとりで、この頃には上組・下組の二組に分かれていた車役人のうち下組の惣代を務めていた。彼が、地下官人蔵人方の支配をしていた出納平田家へ下組車役人の改名や転居を書面で届けた。そこに、岩佐主税は「平野屋孫兵衛」と名乗ると記されているのである。つまり、岩佐主税というのは車役人としての名前であり、町方では平野屋孫兵衛という町人として活動するというわけである。

さらに興味深い史料を挙げよう。享和二年（一八〇二）の九月二五日、上御霊社の牛車が完成したことに伴い、神社境内に牛車を収納する「車舎」を建設することになった。そこで、建設費用を調達するため、各方面に金銭の寄進を依頼している。この寄進依頼をうけた平田職厚が次のように記している。

【史料4】⁽²⁹⁾

一上御霊社今度 大舞宮御車出来并御車舎造作ニ付寄進物之儀〇依多少可上様先達而御世話方平野屋孫兵衛父理助来〇町内年寄方〇も右之趣申来、依之出納家分金子式百疋、平野屋理助方へ為持遣、隠居分^{名前矢田伊豆目銀町内}拾又年寄沢屋方へ遣也

出納平田家のもとへ寄進の依頼に来たのは、上御霊社牛車世話役の平野屋孫兵衛ではなく、その父の「理助」であった。先の【史料3】からは、「理助」とは惣司孫之進であることがわかる。惣司孫之進も車役人のひとりで、当時は車大工・車副であった。つまり、車役人としては岩佐主税（車役惣代・車副）・惣司孫之進（車大工・車副）と名乗っているが、二人はそれぞれ町方では平野屋孫兵衛、平野屋理助と名乗る親子だったのである。

してみれば、【史料2】で惣司孫之進が、吉田弥一のところへ、牛具糸具の史料閲覧を依頼していたことも腑に落ちる。「世話方」平野屋孫兵衛の父、平野屋理助〓惣司孫之進もまた、上御霊社の牛車製作に深く関わっていたからである。

このことから、上御霊社の祭で使う牛車の新調にあたっ

て、いわば禁裏御所で運用されている正真正銘の牛車を扱っていた禁裏車役人が中心となつて関わっていた事実が明らかになる。しかも、平野屋理助¹¹惣司孫之進は車大工として、御所における牛車の修繕や新調などに関わる立場であつた。

例えば寛政元年（一七八九）十一月には巴七葉車・八葉車・杏葉車の新調が計画され、翌年には青綺門院の葬儀で使う牛車を調進することにもなっている。¹²当然ながら、惣司孫之進は、車大工として一連の作業に関わっていたはずだから、各種図面などの資料に加えて、必要な作業や依頼すべき業者などの知識は持っていただろう。惣司孫之進が車童子吉田弥一に牛具糸具などについての史料閲覧を依頼していたが、彼は牛車本体についての情報は求めていない。これは、彼が既に牛車の車体部分については、十分な知識を持っていたことを示しているよう。

上御霊社の牛車は、既に十分な経験と知識を持っていた車役人が中心となつて導入を進め、おそらくは製造の実作業にも深く関わっていた。そのため、短時間でしかも禁裏御所で使用されている牛車に見まがうばかりのものを製造することが出来たのである。棧や榻、掛竿など、必ずしも

祭礼で使用される牛車には必要とされない道具類が整えられたのも、製作に関わつた人びとにとつての「あるべき牛車の姿」に近づけるためだったのであろう。

なお、現在の還幸祭では牛車に車童子に扮した少女が参加する。この製造当時には車童子は史料の閲覧を依頼されているが、積極的に関与していた形跡はなかった。だが、一九世紀における上御霊社の年中行事に関する記録を見ると、八月七日条に「御車童子頼遣工事」という記事があつた。還幸祭は八月一八日なので、時期から考えても御車童子への依頼は還幸祭での牛車運行に関わるものと考えるのが自然だろう。恐らくは、実際に牛車を運用するにあたっては、それなりの経験と技術を必要とするため、不測の事態に対応するためにも禁裏御所での牛車運行に関わつてきた車童子にも協力を依頼するようになったものと考えられる。

おわりに

以上のことから、上御霊社の還幸祭で使われる牛車は後陽成天皇の寄進ではないということ、御所から下賜された

ものではないが、享和二年（一八〇二）に登場したもので、御所の牛車に直接関わり専門知識を持っていた地下官人が関わっていたことが明らかになった。

地下官人といっても、多くは株を買って地下官人の身分を手に入れた者であり、普段は町人である。彼らは、上御霊社の氏子域に居住する町人として牛車の製造を発起し、一方で地下官人ゆえの御所とのパイプを活かして牛車の使用許可を獲得し、さらに専門知識を活かして相当に完成度の高い牛車を製造することができたのである。

かつて三宝院義演が、牛車ではなく「板輿」を使わざるを得ない自身の現状について「零落無念」と記していたように、板輿よりも牛車は格上の乗物であった。『拾遺都名所図会』に描かれていたように、一八世紀の猿田彦の神面は板輿のようなものに乗せられていたわけだから、享和二年（一八〇二）に牛車が導入されたことで、猿田彦神面の乗物がアップグレードしたことになる。これは、猿田彦に先導される神輿そのものの格を上げることにもなるだろう。

それでは、上御霊社の還幸祭において、猿田彦の神面を乗せる牛車が登場することになったのが、なぜ享和二年（一

八〇二）でなければならなかったのだろうか。

その答えとして、まずは当時の光格天皇のもとで、寛政度内裏の建設や朝儀の復興などが進められ「復古ブーム」とも呼びうる風潮が生まれていたことが挙げられよう。⁽³³⁾ 加えて、寛政二年（一七九〇）に光格天皇による御所への遷幸の影響も指摘できよう。天明の大火で聖護院を仮御所としていた光格天皇は、この年に新造された内裏へ移る。この時、天皇は鳳輦を使用するのだが、女院の移徙などに牛車が使用されている。天皇による行幸自体が江戸時代には珍しく、光格の遷幸時の様子は「天皇御遷幸御行列之図」という摺り物として刊行もされている。⁽³⁴⁾ 避難先から復興した御所への天皇の帰還にとどまらず、京都の人びとにとっては一種のスペクタクルとして体験されたというわけである。

そこで印象的なのは、「出車」が光格天皇の遷幸行列を先導していたことである（図5）。「出車」とは、盛儀にあたって行列を装飾するために加わる牛車である。行列を華やかに、格式の高いものとするための要素としての牛車が「出車」だったのである。

ここで、上御霊社の還幸祭で登場する牛車が、【史料2】



図5 「天皇御遷幸御行列之図」(早稲田大学図書館蔵)に描かれる天皇が乗る鳳輦を先導する出車

に「出車之通」とあるように当初から「出車」を意識した装飾とされていたことも想起したい。

つまり、京都で寛政二年(一七九〇)に見られた天皇の遷幸行列がひとつの手本となり、上御霊社の遷幸祭でも、神輿を先導する猿田彦は牛車(「出車」)であるべきだという発想が氏子の間で生まれ、「段々被願御所同様之御車」とあるように、地下官人などの朝廷とのパイプを駆使して御所で使われている出車と同型車両の使用を願って朝廷との交渉を重ねていたのではないだろうか。

御所で使用している牛車と違わぬものを製造することを可能にしたのが、氏子のなかに実際の牛車の製造や運行に関わっていた地下官人が存在していたことである。

してみれば、京都、とりわけ主として上京の祭礼行列に牛車が登場しているのは、氏子が朝廷と日常的な場面でも密接な関わりを持ちうるという地域的特性に規定された現象ということもできそうである。

こうした過程を経て製造された上御霊社の牛車は、伝えられているような後陽成寄進ではなかったものの、近世禁裏の牛車を知る上で貴重な作例といえるかもしれない。³⁵⁾

註

(1) 現在の正式な名称は御霊神社である。本稿では、下御霊神社との区別するために史料上の文言を除いて「上御霊社」と表記する。

(2) 櫻井芳昭『ものと人間の文化史 牛車』吉川弘文館、二〇一二年、京楽真帆子『牛車で行く』吉川弘文館、二〇一七年、拙稿「近世上賀茂神社社領の牛飼と朝廷」(『奈良大学大学院研究年報』二八号、二〇二三年)、拙稿「近世朝廷の牛車と車役人に関する基礎的考察」(『奈良史学』四〇号、二〇二三年)

(3) 岸泰子『近世の禁裏と都市空間』東京大学出版会、二〇一四年

(4) 村山弘太郎「近世京都における朝廷よりの祭具拝領」(『京都民俗』第二十六号、二〇〇九年)、同「貴所からの祭具拝領」(『京都剣鉾のまつり調査報告書Ⅰ』論説編、京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会発行、二〇一四年)

(5) 大島新一「鉾の出る祭とその歴史的背景」(『京都民俗』第六号、一九八八年)、『京都剣鉾のまつり調査報告書Ⅱ』民俗調査編(京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会発行、二〇一四年)など。

(6) 応仁の乱後から近世にかけての上御霊社の御霊祭については、本多健一「中世の御霊祭」(同『中近世京都の祭礼と都市構造』吉川弘文館、二〇一三年、同「一六世紀の御霊社・御霊祭と都市空間」(前掲書)、同『京都の神社と祭り——千年都市における歴史と空間——』(中公新書、二〇一五年)、河内将芳「戦国・豊臣政権期京都の御霊祭」(同『都市祭礼と中世京都』法蔵館、二〇二四年)。

(7) 中西仁「末広神輿考」(『佛教大学大学院紀要』四九号、二〇二一年)

(8) 現行の上御霊祭については、『京都剣鉾のまつり調査報告書』民俗調査編(京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会発行、二〇一四年)の「御霊神社(上御霊神社)御霊祭」の福持昌之「①祭礼と由緒」が簡潔に整理している。ここで牛車が使用されている事実や後陽成の寄進と伝えら

れていることについては触れられている。前掲大島新一論文には、一九八六、八七年当時の調査による報告が掲載されている。

(9) 車舎は二〇一五年八月一八日に修復されている。

(10) 『輿車図考』下巻(『故実叢書』第三六巻、明治図書出版、一九九三年)

(11) 氏子域が広いため、還幸祭の巡幸は北部中心のコースと南部中心のコースを隔年で採用している。調査を行った二〇二四年は北部へまわる巡幸路であった。

(12) 「牛車一四〇年ぶり京都御所内へ」『朝日新聞』二〇一二年五月八日朝刊。二〇〇九年から、神輿のみが御苑内に入ることが許可されていたが、二〇一二年から牛車も入ることができるようになった。二〇一三年からは、神輿・牛車に加えて行列全員が御苑に入ることができるようになった(「一四〇年ぶりの行列華やか」『朝日新聞』二〇一三年五月一日朝刊)。なお、新型コロナウイルス感染症の拡大とともに行事は一時縮小されていたが、二〇二二年の還幸祭で三年ぶりに京都御苑内へ神輿が入っている(「三年ぶりに神輿が京都御苑練り歩く」『産経新聞』二〇二二年五月一日 web 記事)

(13) 現地では、木の枝などが邪魔になる場合、枝を持ち上げて車体にあたらないようにするためのものであると説明された。これは、二次的な利用法であろう。

(14) 『群書類従』第三輯「帝王部」続群書類従完成会、一九三三

年

- (15) 『義演准后日記』文禄五年正月一日条(『史料纂集 義演准后日記』第一、続群書類従完成会、一九七六年)
- (16) 『光豊公記』慶長八年二月一〇日条(『京科大学史料叢書 光豊公記』思文閣出版、二〇一二年)
- (17) 『言経卿記』慶長八年二月二三日条、二月二五日条(『大日本古記録 言経卿記』第二卷、岩波書店、一九八三年)
- (18) 『義演准后日記』文禄五年正月一日条
- (19) 慶長一四年(一六〇九)には、伊勢の式年遷宮にともなう奉幣使が再興されているが、この際も大乘院門跡の車を借用することになっている(『小槻孝亮宿禰日次記取要』二、慶長一四年九月五日条、国立公文書館蔵、請求番号 163-0103-0002 デジタルアーカイブで公開)。
- (20) 『日次紀事』卷八(『新修故実叢書』第四卷、臨川書店、一九六八年)
- (21) 前掲『日次紀事』卷八では、神面について、鼻長大で俗に「王ノ鼻」と称すと記している。後述する【史料1】【史料2】でも「王ノ鼻」という表現が使われており、道祖神・あるいは猿田彦というのは一種の神学的解釈であり、民俗語彙としては「王ノ鼻」が使われていたのであろう。
- (22) 『平田職厚日記』享和二年八月一八日条(宮内庁書陵部蔵・東京大学史料編纂所H-CAT Plusで画像公開)。以下、『平田職厚日記』については、所蔵を略し、史料名と日付のみを記す。
- (23) 後掲の『御車役儀日記』【史料2】に「俗ニヲ、ノハナ又猿田彦」とあり、王之鼻＝猿田彦であることは間違いない。
- (24) 村山弘太郎前掲論文
- (25) 『御車役儀日記』卷一五、享和二年六月二五日条(宮内庁書陵部蔵 函架番号43・163)
- (26) 「轅」とは、牛車などの台下に取り付けた長い棒を指すこともあるが、こうした場所に乗るようなことはしない。『拾遺都名所図会』には手輿のような乗物が描かれているので、「白キ輿」とは手輿のことと思われる。
- (27) 『親町要用亀鑑録』には、天明大火時に上京の朱印を「上柳原町預り番二而、年寄笹屋九兵衛殿洛北鞍馬迄守護致候而被立退候二付、御朱印無別条事二候」とある(『日本都市生活史料集成』第一卷「三都篇一」、学習研究社、一九七七年、四六頁)。
- (28) 『平田職厚日記』寛政一二年九月二五日条
- (29) 『平田職厚日記』享和二年九月二五日条
- (30) 『平田職厚日記』寛政元年一月一四日条
- (31) 『平田職厚日記』寛政二年二月二日条
- (32) 弘化三年諸記録帳(「上御霊神社文書」五号、京都市歴史資料館架蔵写真帳)のうち「年中行事日記」
- (33) 藤田覚『天皇の歴史六 江戸時代の天皇』講談社学術文庫、二〇一八年、二二九頁、同『光格天皇』ミネルヴァ書房、二〇一八年
- (34) 「天皇御遷幸御行列之図」(早稲田大学図書館蔵、請求番号…

- (35) 無論、享和二年（一八〇二）製造当初のものと断じるには、
車体の精査が必要となるだろう。

【付記】

本稿執筆にあたっては、史料の閲覧と利用、図版掲載にあたって、
宮内庁書陵部、早稲田大学図書館、京都市歴史資料館のお世話に
なった。ご高配に感謝申し上げる。また、本稿は二〇二四年一〇
月二七日に國學院大學で開催された日本民俗学会第七六会年会で
口頭報告した内容をもとに成稿したものである。